

「全てが益となるように」

ローマの信徒への手紙 8章 26～28節

日本キリスト教会浦和教会牧師・本学講師 三輪 地塩

ヨハンナ・シュピリの『アルプスの少女ハイジ』という作品があります。実にキリスト教的なストーリーです。ハイジは、母親に連れられて、アルプスの「アルム」という山奥で暮らすおじいさんのところに預けられます。天性の明るさと利発さを持っていた彼女は、大自然の中でさらに豊かに成長するのです。しかし、おじいさんがハイジを学校に通わせないことを知った母親は、ハイジの将来を心配し、大都市フランクフルトに引越して、そこの学校に入学させるのでした。読み書き、算数、しつけ、マナーなどなど、それまで行なってこなかった難しい勉強をたたき込まれ、山の大自然の暮らしとは正反対の忙しく厳しい生活を送るようになるのです。天性の明るさは影をひそめ、都会の生活になじめず、とうとうハイジは精神を患ってしまいました。精神科医の診断は「山の生活に戻ることに」でした。

とは言え、大都会の暮らしは、必ずしも悪いことばかりではなく、クララという大親友とそのおばあさんと出会えました。クララのおばあさんの熱心なキリスト教信仰に触れ、ハイジは聖書の話しを聞き、神の存在と祈る素晴らしさを「大都会で」学ぶのでした。そこでハイジは、パウル・ゲルハルトの讃美歌「朝の恵み」という次のような詩を教えられます。

黄金の太陽は、喜びと歓喜に満ち、

私たちの世界にその輝きと一緒に、心を爽やかにする光を届けてくれます。

打ちひしがれていた 私の頭と手足は、再び起こされ、

私は元気に明るく、空に顔を向けます

(パウル・ゲルハルト)

パウル・ゲルハルトは、讃美歌 107 番の作詞家として有名なルター派の牧師です。「打ちひしがれていた私の頭と手足は、再び起こされ、私は元気に明るく、空に顔を向けます」とは、心や体の「回復」のことです。『アルプスの少女ハイジ』という物語は、「自然 vs 都会」という二元論的価値観を読者に強要せず、「どちらにも良い部分がある」ことを伝えます。自然の良さ、都会での出会い、この両面がハイジの心も体も成長させるのです。自然を通して神を知り、聖書を通して神を知る。豊かさを通して神を知り、苦しみを通して神を知る。ハイジの物語は、人間に起るすべての出来事の中に、神の深い思慮があることを示すのです。

ローマの信徒への手紙 8章 28節には「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています

す。」とあります。私たちの身の回りで起こる、すべての苦しみ、悲しみ、痛み、嘆き、絶望、、しかしそのすべてが、神のもとで「万事が益となるように」働くのだ、と聖書は言います。

今現在、苦しい人たち、痛んでいる人たち、希望を持ってない人たちが大勢います。もしかすると、あなたがその一人かもしれません。しかし、それでも大丈夫だと聖書は言うのです。あなたの苦しさ、心の痛み、絶望のすべてが、必ず益となるからです。言葉に表せない「うめき」を神はつぶさに見つめ、癒やし、力づけて下さいます。心配なことが多い日々です。しかしその先にある希望に向けて、今が「益」となることを信じて、一緒に歩んで行きましょう。

神様。痛み苦しむ私たちに、あなたの力強い手を差し伸べてください。いかなる時にも、神の祝福と恵みが豊かであることを示してください。私たちのふさぐ心を晴れやかに、落ち込む魂を軽やかに、うつむく視線を神に向けさせてください。聖学院にかかわる全ての人々が、あなたの大きな計画を知るその時まで、力づけ、励まし、元気に歩ませて下さい。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2020年10月22日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」